



(社)全高P連会報

社団法人全国高等学校PTA連合会（連絡先）〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-1（奥田ビル）TEL03-5835-5711 FAX03-5835-5757
 発行人 高間専逸 URL <http://www.zenkouren.org/> eメール info@zenkouren.org

第59回全国大会・沖縄大会

拓くたくましさ つなぐ優しさ 築こう親子の輪

ティード(太陽)の島から全国へ発信
 地域で肝心《ちむぐる》育てる教育を



スカイブルーとカラフルな花で溢れる亜熱帯の島沖縄。グスクに象徴される古代から、琉球王国の時代を経て、厳しい大戦を乗り越え、今日、沖縄県は観光と健康に恵まれ、多くの人々が移り住みたいと願うほどに明るく活気とした島々の地として自然や文化を誇っています。



メイン会場に全国から一万一千人の会員が参加し全国大会が開催されました。二十七日の全体会では、新垣和歌子実行委員長の「沖縄では昔から『地域の子は地域で共に育む』と言う助け合いの心で子育てが行われてきました。子どもたちが未来に羽ばたいていけるよう、会員の皆様が各分科会を結ぶの精神で研究討議がなされることを期待します。」との開会宣言に続き、高間専逸大会会長の式辞、続いて来賓の山内俊夫文部科学副大臣、仲井眞弘多沖縄県知事、伊波洋一宜野湾市長よりご祝辞を頂きました。長年PTA活動に尽力された個人・団体の表彰式が

あり、その後琉球大学教育学部教授新城澄枝氏による『十八歳までに育てたい食の自己管理能力』の講話がありました。最終日の二十八日には、七分科会が行われました。人間国宝宮城能鳳氏による講演『伝統楽劇組踊の魅力―その見どころ聴きどころ』と題し、中国と琉球の歴史、組踊りを誕生させた玉城朝薫の話が各分科会で中継され、各会場の舞台上では琉球舞踊が披露されました。「琉球文化の深さに感動し、それを受け継ぐ子どもたちに更に感動しました。最高の沖縄大会でした。」等の声が多く参加者から寄せられました。次期大会は、日本の中心東京です。

全国大会 沖縄

会長あいさつ	1 頁
実行委員長歓迎のことば	2 頁
文部科学省祝辞	2 頁
大会宣言文	3 頁
分科会報告	3 頁
平成21年度第一回全国会長・事務局長会議	4～7 頁
講演「安心ネットづくりに向けた取り組みについて」	8 頁

今号の主な内容

シリーズ視点「携帯電話」	9 頁
シリーズ青春白書 全国からの便り一輝く姿がここにあるー	
北海道札幌拓北高等学校	
「地域と共に自然を守る活動を続けて～理科研究部の活動の紹介～」	10 頁
群馬県立前橋西高等学校	
「堅忍剛健 自律敬愛」	11 頁
副会長紹介・各委員会報告	12 頁

あいさつ

社団法人全国高等学校
P T A連合会 会長

高間 専逸



第五十九回全国高等学校P T A連合会大会沖縄大会を、すみきった青い空と、エメラルドグリーンの海、豊かな自然に囲まれ、華麗な琉球王朝の文化遺産を残す沖縄の地におい

歓迎のことば

第五十九回全国高等学校
P T A連合会大会沖縄大会
実行委員会委員長

新垣和歌子



第五十九回全国高等学校P T A連合会大会を開催するにあたり、文部科学副大臣、沖縄県知事をはじめ多くのご来賓のご

て、文部科学副大臣、沖縄県知事を初め多くのご来賓の皆さまにご臨席賜り、全国各地より一万有余の会員の皆さまにご参加いただき盛大に開催できますことに、心より厚くお礼申し上げます。

本連合会は高等学校のP T A活動を通して、家庭教育の充実を図り、家庭、学校、地域社会との連携を深める中で、子どもたちの健全育成を大きな目標として、数々の教育課題に取り組んでいるところであります。

今年は第四回となる

臨席を賜り、ありがとうございます。また全国各地より多数の会員の皆さまのご参加をいただきましたことに、心よりお礼を申し上げます。

ようこそ、コバルトブルーのサンゴ礁の海と豊かな自然に恵まれた亜熱帯の沖縄にお越し下さいました。本県の会員を代表いたしまして、心より歓迎申し上げます。

さて、今日、子どもたちを取り巻く社会環境が急激に変化する中で、全国どの地でも家庭や地域

リクルートとの共同事業「高校生と保護者の進路に関する意識調査」を実施し、進路に関する親と子のコミュニケーションの、より良いあり方を検討して、研究を深めたいと思います。また、文部科学省の委託事業として、本大会特別第三分科会において「ネット社会におけるP T Aの役割」が討議され、同じテーマで全国九地区において研修をしていただきましたが、その内容をまとめて紀要を作成いたします。さらに、「子どもを取り

の教育力が低下し、地域社会の人間関係も希薄になったと言われております。そのため、さまざまな課題が生じて、それに対応し善処するための策が求められております。今、私たち親にできることは、周りの人たちと連携を密にして真剣に考え、自信をもって子どもを導き、寄り添い、見守ることだと思えます。

本大会におきましては、未来に向けて羽ばたいていく子ども一人ひとりがたくましく豊かな心

巻く人間関係の回復と社会環境の充実」事業においては、昨年は「親は子どもに何を伝えているか。どう伝えているか。」とI T社会における親子関係(大人の役割)について調査し、ゲーム・I T・携帯電話・テレビ等のバーチャル社会に生きる現代の高校生は、どのような生活を送り親子関係を高めどのような人間関係を形成しているか、親世代が高校生だった頃と現代は何が異なるのか、現代の社会環境に必要な親子関係のあり

をもつて成長することを願う「拓くたくましくつなぐ優しさ 築こう親子の輪」をメインテーマに掲げ、「結いの精神で育む 青少年の美ら肝心」をサブテーマとしました。沖縄では昔から地域が一つの共同体として、我が子も人の子もみな大切な存在という気持ちで「地域の子は地域で共に育む」という助け合いの心で子育てが行われてきました。それは、先祖から受け継がれ、誇りにしている精神文化の一つです。

をもちつて成長することを願う「拓くたくましくつなぐ優しさ 築こう親子の輪」をメインテーマに掲げ、「結いの精神で育む 青少年の美ら肝心」をサブテーマとしました。沖縄では昔から地域が一つの共同体として、我が子も人の子もみな大切な存在という気持ちで「地域の子は地域で共に育む」という助け合いの心で子育てが行われてきました。それは、先祖から受け継がれ、誇りにしている精神文化の一つです。

方、大人社会の役割について探求しましたが、それを受けまして、今年度は、「子どもたちの心とその背景」を調査分析し、高校生の生活・意識を理解し、保護者の支援のあり方の参考になるように提案をいたします。調査分析に終わることなく、会員の皆さまが活用できるようにと考えているところであります。

お集まりいただきました会員の皆さまには、お互いの心の繋がりをもち、研究協議、情報交換を行っていただき、今大会

人々の心が温かい沖縄で、子どもたちがたくましく未来に向け羽ばたけるよう、全国の会員が各分科会で「結いの精神」をもって研究討議がなされることを期待します。

沖縄県は、他府県と地理、歴史、文化面で大きく異なったものがあり、先人たちが造り上げた独特の有形無形の数々の誇れる文化があります。本大会におきましてもアトラクションや講演で沖縄の魅力を感じてもらえれば幸いに存じます。

が実り多きものとなることを願っております。

最後に、長年のP T A活動にご尽力され、今大会において表彰を受けられる皆さまの功績に敬意を表し、お祝い申し上げます。今後とも地域においてご支援いただけますようお願い申し上げます。また、本大会の開催にご尽力されました沖縄大会実行委員会の皆さまに心から感謝とお礼を申し上げますとともに、会員の皆さまのご健勝、ご活躍、ご多幸を祈念し、ご挨拶いたします。

また、来年は本県で「全国高等学校総合体育大会」が初めて開催されます。県民あげて各県の高校生を温かく迎えたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

結びに、本大会の開催にあたり、文部科学省をはじめ、沖縄県、那覇市、浦添市、宜野湾市、沖縄市並びに関係諸団体の皆さまに多大なるご支援を賜りましたことに対し、心より感謝を申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

祝 辞

文部科学副大臣

山内 俊夫



第五十九回全国高等学校PTA連合会大会が、ここ沖縄県において盛大に開催されますことを心よりお慶びを申し上げます。PTAの皆さまにおかれましては、青少年の健全な育成と高等学校教育の振興のため、日ごろより全国各地で活発なPT

A活動を展開されておりますことに心から敬意を表しますとともに感謝を申し上げます。近年、産業行動の変化や国際競争の激化、雇用情勢の悪化など世界は先行き不透明な時代を迎えております。その中で我が国がこの難局を克服し、強く明るい国となっていくために、今こそ教育の充実が必要であると確信をいたしております。本大会において、全国からお集まりの皆さま方が「拓くたくましさ つなぐ優しさ 築こう親子の輪」をメインテーマとして、今後のPTAのあり方について研究討議

をされることは地域の教育力の再生に向け、大きな力になっていくものと期待をいたしております。さて、高等学校教育につきましましては、本年三月に学習指導要領の改定をいたしました。この新しい学習指導要領は来年度より一部先行実施し、平成二十五年に入学生から年次進行で全面的に実施することとしております。文部科学省といたしましては、保護者の皆さまをはじめ、広く社会に対し、その趣旨、内容を周知していくとともに円滑な実施に向けて必要な条件整備に努めてまいりたいと思います。一方で、若年無

業者、失業者、フリーターや新卒者の早期離職が問題になるなど、学校から社会へ職業への移行が必ずしも円滑に行われていない状況も見られます。このような状況を踏まえて、今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について、本年一月に設置した中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会において、検討を進めているところであります。また、昨今の経済情勢の悪化を受け、経済的理由により就学困難な学生への支援を強化するため、従来の取り組みに加えて、都道府県の高校奨学金事業への緊急支援を行う高

校生就学支援基金を創設いたしました。さらに、人生前半の社会保障として公教育の機会を確保することがますます重要になっている中、塩谷大臣が主催した「教育安心社会の実現に関する懇談会」は七月三日、公教育の負担の安心と質の安心の両面において、社会全体で取り組むことの必要性和具体的な方策について報告を取りまとめております。文部科学省といたしましては、これらの提案を踏まえて可能な施策から速やかに実行できるよう努力をいたします。PTAの皆さまにはおかれましては、引き続き文部科学省の取り組みや

施策の周知についてご理解とご協力をいただきますとともに、子どもたちが安心して、健やかに成長できる社会の実現に向けて、今後ともご支援いただきますようお願いいたします。最後に、本大会の開催のためご尽力をいただきました社団法人全国高等学校PTA連合会及び沖縄県高等学校PTA連合会沖縄大会実行委員会をはじめ、関係の皆さまに感謝を申し上げますとともに、本日も集まりの皆さまのますますのご健勝と高等学校PTAの一層のご発展を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

大会宣言

第五十九回全国高等学校PTA連合会大会沖縄大会は「拓くたくましさ つなぐ優しさ 築こう親子の輪」、「結の精神」で育む「青少年の美ら肝心」をテーマに全国各地からここ「美ら島沖縄」の地に一万有余名の会員が集い、盛大に開催され多大な成果を収めた。

近年、国際化・情報化の進展は著しく、米国に端を発した世界的な経済危機が日本経済にも大きな影響をあたえ、就職内定取り消し、失業問題といった雇用情勢の悪化等、青少年を取り巻く社会環境が急激に変化している。

今日のような時代において、明日を担う青少年がたくましく希望をもち、思いやりのある豊かな肝心を基軸とした、「生きる力」を身に付け健全に成長するために、家族・学校・地域が一体となって、私たちPTAは青少年を支援していく。

ここに大会の成果を踏まえ、我が国を支える青少年が世界に羽ばたく力を身につけるような人間力の育成をめざし、次のことを宣言する。

記

- 1 青少年の規範意識を高めるために、親が手本となり「当たり前」のことが「当たり前」にできるように、常日頃から家庭・学校・地域が協力して声掛けすることが大事である。

人間関係が希薄になりつつある今日、親子で人間としてのあり方・生き方を語り合い、日本人が失いつつある家庭教育の「しつけ」を再構築して青少年の育成に努める。

- 1 グローバル化が進展するなか、「生きる力」を身に付けるための基礎学力の向上と確固たる人間、形成の確立は重要である。

私たちPTAは、学校や関係団体等と連携を密にし、青少年の能力・適性を引き出し、将来への希望・目標に向けた夢実現を支援する。

- 1 青少年を取り巻く社会環境は常に変化しており、適正な判断と行動が求められる。常に主体的に物事を判断し、自己を見失うことなく行動できる人間の育成と青少年が健やかに成長できる親子の輪を「結の精神」でさらに深化させ、地域の輪の創造を支援する。

- 1 高度情報通信社会がますます進展する今日、インターネット、携帯電話の普及は青少年の健全育成にも大きな影響を及ぼしている。その利便性から、多くの青少年が利活用しているが、情報モラル、マナー、コミュニケーション能力などの低下が課題となって憂慮される。

これらの課題解決のために、私たちPTAは、家庭・学校・地域及び関係機関と連携した取り組みを強化していく。

第59回全国高等学校PTA連合会大会沖縄大会において宣言する。

平成21年8月28日

社団法人 全国高等学校PTA連合会

第一分科会

学校教育とPTA

社会への参画意識と主体的に

生き抜く力の育成とPTA活動



二十一世紀を担う子どもたちには夢と希望があり新しい社会づくりができる力を秘めている。子どもたちが社会人として、地域社会の一員として貢献できる人材となるために、また、自ら主体的に行動し社会参画できるために、学校、家庭、地域社会がどのような関わり、支援すべきかについて沖縄大学客員教授、上門清春氏と沖縄県立那覇国際高等学校校長、新崎速氏を助言者として研究協議を行った。

まず、岩手県立盛岡農林高等学校PTA会長、千葉光一氏が母親委員会の活動について開催のあり方や情報発信の整備の状況、また、本校は自然が豊かで生徒たちは広大な大地と植物、動物等からたくさんものを学び、体験し、これからの日本の農業そして社会

を背負っていく逞しい子どもたちが巣立っていると感じているとの報告があった。

茨城県立石岡第一高等学校PTA会長、堀越忠郎氏は「歴史と伝説が育む生きる力」と題し、好きな言葉の一つである「翌朝の起床を楽しみに就寝する人こそ幸福だ」と述べ、創立百周年を迎え、PTAが子どもたちの模範となる、実社会を生き抜く逞しさや地域を大切にする社会を肝に銘じ、今後のPTA活動に関わっていききたいと語った。また、新潟県立糸魚川白嶺高等学校PTA会長、井合裕氏は「PTAが結ぶ学校と地域」と題し、入学式の式辞の中で生徒たちに、君たちと餅つきをしたと呼びかけた。夢に向けての取り組みと実現、そして、その中で学び得たことと関わる中で生まれた人と人との結びつきを時の流れの中で、いかに次の世代へ繋



いでいくことができるかが糸魚川白嶺高等学校PTAの課題として締めた。最後の発表校、島根県立出雲商業高等学校PTA会長、市場育郎氏は、「出商デパートとPTA」と題し、立ち上げた意義や、来場者数一人、売り上げ九〇〇万円という素晴らしい実績を上げ、その取り組み方や評価等分かりやすく発表、全国に誇れる出商デパートをはじめとする地域に根ざしたさまざまな活動がなされており、まさにこれが親子、地域そして人間として絆を深める生きた教育の場ではないかと呈した。

第二分科会

進路指導とPTA

自らの夢や希望を

切り拓かせるPTA活動



第二分科会では、「進路指導とPTA活動」のテーマのもと四校からの事例発表があった。

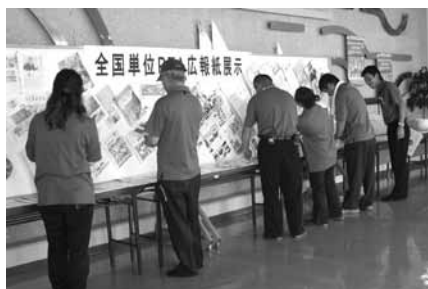
初めに、秋田県立秋田中央高等学校前PTA会長、松本仁氏から「地域と育む開かれたPTA活動」と題し有効なコミュニケーションづくりを目標にPTAの他にPTAOBで組織する教育振興会と同窓会があり、三つの組織で生徒のために協力し合っているとの発表があった。

岐阜県の聖マリア女学院高等学校保護者会会長、澤田栄造氏から「教師、生徒、保護者による三者一体の保護者会活動」「愛がなければ、教育は不可能である」という教育理念のもと教育目標である五つの花言葉「稲穂のような謙虚さ」「菜の花のような温かさ」「ひまわりのような明るさ」「野の百合の

ような素朴さ」「雑草のような力強さ」を目標に豊かな心の育成を行っているとの発表があった。奈良県立王寺工業高等学校育友会長、宮木一也氏から「大和の中心で世界産業人をつくる」親も子も共に社会人として学び合う体験型キャリア教育プログラムが充実しているとの発表があった。

熊本県立八代東高等学校PTA会長、松坂昌弘氏から「学校特色化への挑戦」をテーマに掲げ、学習支援とPTA活動として「豚汁学習会」「東高マーケットふれあい広場」を積極的に行っているとの発表があった。助言では、各学校が独自の良さを生かし活発にPTA活動が行われていると褒める言葉があり、質疑応答・意見交換ではフロアから次々と質問が上がり、活発に分科会が進行した。最後はPTA総会参加についての質問があり多くの参加者が挙手をし

て意見を述べるなど会場全員を巻き込んだ熱気に溢れた分科会であった。



第三分科会

生徒指導とPTA

学校・家庭・地域が連携した

規範意識の育成とPTA活動



子どもたちを取り巻く社会環境は厳しく、事件、事故をとおして見る限り規範意識が低下している。この分科会では「地域の子どもは地域で育てる」ための、地域社会の役割などについて協議した。

事例発表では、栃木県立壬生高等学校PTA会長、谷田部正一氏より、「人間性豊かな壬生高校生の育成」、サブテーマに「広げよう心の和！地域の人々と共に」と題して通学路危険マップ作り、夏季休業中の祭り巡回、食育親子朝食講習会、昼食弁当コンクール、地域や小学校との交流についての実践報告があった。

長野県松本蟻ヶ崎高等学校PTA会長の新井通夫氏より「四者協議会とPTA活動」サブタイトルに「子どもを鍛えて育む」と題して発表があった。四者協議会（生徒・保護者・同窓会・教職員）で構成され、生徒会からの要望があった飲料水用自動販売機導入についての検討を通して、子どもたちは社会と様々に繋がっていること、その難しさを学んで成長したとのことであった。

愛知県立豊田北高等学校PTA会長、河合賢典氏は、市内には一万七千人の外国人が住み、国籍も八十カ国に及んでいる。熱心な学習指導、進路指導により、ほぼ全員が国立公立大学への進路を希望し約七割が合格している。PTA役員による社会人からの提言と題しての講演会、志望校ごとのPTA進路学習会、また、防犯・交通安全にも力を入れているとの発表があった。



宮崎県立宮崎海洋高等学校PTA会長の福元辰夫氏は、県下唯一の水産高等学校で本校のPTA活動の一つに、実習船進洋丸を使つての体験航海があり、子どもたちが長期体験する。ほんの一部であるが、同じ体験で親子のコミュニケーションに役立っている。また、文化祭（海鳴祭）では本校ならではのマグロの解体ショーを行い地域の方々も毎年楽しみにされているとの発表があった。

琉球大学教育学部教授就職センター長島袋恒男氏、県立糸満高等学校校長金城孝忠氏から助言をいただいた。

第四分科会

家庭教育とPTA

結いの精神で共に学び

支え合うPTA活動

親子の会話が少ない、子ども同士も携帯電話などでのメールのやり取りで済ませる。高度情報化の進展に伴い、本来、各家庭でしつめるべき基本的なルールや挨拶などの会話や地域社会にあるべき力が乏しくなっている。

今こそ、各家庭や地域社会が連携し「ゆいまーの心」でそれぞれの役割を担い、ともに学び支え合うことが家庭力のアップにつながるかと考える。家庭教育や子育てという観点から、結いの精神で共に学び支え合うPTA活動を通してなができるか協議がなされた。

北海道函館中部高等学校父母と教師の会会長、岩瀬憲昭氏、大阪千春氏は「母も親父も共に学び愛」コミュニケーションを育むPTA活動と題し、様々なPTA活動を通して、学校が身近なもの、いつでも学校に足を運べるといった雰囲気

気を醸し出すことができることにより子どもの教育への関心が高まり、家庭力のアップにつながる発表された。

東京都立田無工業高等学校PTA会長、芝田直樹氏は、「学校・地域・家庭を結ぶPTA」若い発想で明るい楽しいPTA活動と題し、家庭教育の中心は親で人生の先輩としての姿を見せていくことができるかを説き、明るく、楽しく、元気がよく、また、楽しくなければPTAじゃないとの視点で発表がなされた。

和歌山県立日高高等学校・附属中学校（社）双成会副会長、中井みゆき氏は、「すべては子どもたちのために」と題して、PTAとは「子どもの幸せ」のために限られた時間の中で、会員一人一人の連携・行動することが大切だ



と報告された。

徳島県立城ノ内高等学校PTA会長、長濱賢一氏は、「家庭における情報教育」併設型中高一貫教育校の取り組みと題し学校配信「やまもも通信」を通し、保護者から提案や意見・相談をいただきながら子どもたちを守っていくことの発表がなされた。

最後に、沖縄女子短期大学客員教授、津留健二氏と琉球大学教育学部教授、井上講四氏から助言をいただいた。

特別第一分科会

環境教育とPTA活動

〈地球温暖化や自然環境保護を意識したPTA活動〉



基調講演

の中で沖縄大学学長の桜井国俊氏は未来を担う若者たち

（小中高生・大学生）の環境教育は

さらに強化される必要がある。それは単なる知識の注入ではなく、K（知識）、S（技能）、A（態度）の3要素が伴う必要がある。環境問題の知識だけが現実実践が伴わないならばモラルハザードが起き、地球市民として

来世代を育てることになると提言された。

長田小学校校長の横山芳春氏をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われ、アースの会の宮良氏からは、イベントなどで使う食器類を貸し出すことにより、使い捨て食器が使われなくなる。そのことがエコに貢献することや、生ご

ミを処理し堆肥を作り、それを使って野菜づくりをしていることなどの報告があった。

沖縄尚学高等学校二年生の高校生の松本さんからは、学校の部活動としてアイアーン部に所属し、書き損じハガキプロジェクトやエコバックプロジェクトなどを行い恵まれない海外の子どもたちを支援していることや気候チャンピオンプロジェクトに参加し、サンゴの白化現象の問題を取り上げるなど海外とも連動した取り組みの報告がなされた。

宮古実業高校教諭の前里さんからは、宮古島の地下水汚染が問題になりつつあるとの報告があった。宮古島は珊瑚礁の島であるために地下水が飲料水、農業用水として使われているが最近、化学肥料や家畜排水などの影響を受け、地下水汚染が懸念されているとのことである。高校生たち



がその改善のために取り組みを行い、水のノーベル賞といわれている青少年水大賞をアジアで初めて受賞したとの報告があった。

琉球大学教授の伊波さんからは、現在、琉球大学ではエコキャンパス宣言を行い、環境マネジメントシステムエコアクション21を三力年間かけて全学的に取り組んでいるとの報告があり、エコマインドをもつ学生を育てていくことが大学に課された使命であると結んだ。

特別第二分科会

親と子のシンポジウム

〈世代を超え語りつなぐ次代への夢〉



特別第二分科会

は、メインテーマが「親と子のシンポジウム」サブテーマが「世代を超え語りつなぐ次代への夢」のもとにパネルディスカッションが行われた。

基調講演の中で、沖縄テレビの前原氏は南米やハワイなど世界の多くの国に移住していった人々のウチナー人が沖縄人としてのでアイデンティ

ティーを大事に、さまざまな行事や歌、三味線、踊りなどの伝統芸能などをとおして沖縄人としての誇りをもって生きていくことが紹介された。しかし、近年では沖縄が本来もっている優しさとか思いやりの心いわば「チムグクル」が本土復帰後急速に他府県に追いつき追い越せや同化しようという流れの中で薄れてき



ているのではないかと指摘があった。

パネルディスカッションでは、高校生の内間さんから、自分も沖縄県の中の伊江島という小さな島から出てきているが、島で学校や地域の人たちに教えていただいたことや親の支えが今の自分を後押ししている大きな力になっているとの意見があった。

また、高校教諭の仲村氏からは、新聞に二年間ほど「黄金言葉」を連載したことわざは、地域が育んできた子どもたちの心を支えている柱である。おばあさん、お父さん、お母さん、おじさん、地域の人などの言葉が柱として立って

いたらどんなことが起きて揺らがないしつかりした。今は地域の結びつきが徐々に薄れてきている。しかし、一方ではエイサーや太鼓、踊りなどこれまではその地域にはなかった沖縄的なものが他の地域にも広がりをみせているのは良いことである。

た人間になるのではないかと意見があった。

ファクションデザイナーの山内さんからは、フランスでのパーティーで急に自分をアピールしないといけない場面があった。とっさに思いついたのが沖縄の民謡を歌い力チャシー踊ることだった。それがとてもうけてたくさんの友達ができ、フランスでの生活が楽しくなった。沖縄の文化に支えられたとの意見があった。

音楽家の比嘉さんからは、地域に出かけて行って祭りを見たり取材したりしているが、以前は祭りが核になって子どもは綱作りなど親の手伝いをして地域が一体になっていた。今は地域の結びつきが徐々に薄れてきている。しかし、一方ではエイサーや太鼓、踊りなどこれまではその地域にはなかった沖縄的なものが他の地域にも広がりをみせているのは良いことである。

高度情報技術の進展が著しいデジタルメディア社会においては、インターネットや携帯電話の利便性とその使用方法に関する情報モラルの確立や正しいマナー指導が喫緊の課題となっている。これらの課題を解決するために家庭が学校、地域社会、関係機関等と連携して、子どもたちの情報モラル教育にどう取り組むか等について研究協議

倫理やモラル教育の在り方について提言があった。パネルディスカッションは、コーディネーターのKBC学園校長の稲垣純一氏の「人類の歴史の中で、「新しい道具」は常にそれまで存在しなかった新しい問題を生み出してきた。「しかし、農耕社会にしろ、産業革命にしろその前の時代に返ることはありませんで

した。『新しい道具によって引き起こされた問題』よりも『新しい道具』によってもたらされた福音があまりにも大きいからです。現在私たちが直面しているインターネットや携帯電話の問題をこんな視点から考えてみたいと思います。」という提言からスタートした。パネリストとして登場した、ITボランティアグループ「親子ネット」の活動をされている沖縄県親子ネット会長の親泊信雄氏は、相手の顔が見えないネット上において、一人ひとりがネチケットを守ることの重要性を強調。沖縄県警察本部情報セキュリティ・アドバイザー赤嶺智氏は、インターネットや携帯電話を利用する際に自分自身を守るポイントとして、「①見ない②書き込まない③絶対に会わない」三つのNOを強調。沖縄県教育庁県立学校教育課指導主事の屋良淳氏は、「ケー



基調講演では琉球大学教授の米盛徳市氏からインターネットの特性である匿名性や広域性によって、高校生が簡単に有害サイトや闇サイトなどで犯罪に巻き込まれる現状や高等学校裏サイトの実態等の報告があり、今後の対策、連携のあり方、情報

タイは、多機能化が進み、もはや電話ではない。新しいサービスが次々と提供されており、そこでは新しいモラルを身に付けるべき」と提言。県立那覇西高等学校三年の糸満美菜子さんは、「ネット社会のワナや危険性を高校生としてしっかり認識して携帯電話等を使いこなせば問題はない！」と力強く発言した。会場からもインターネットや携帯電話など新しい道具によって引き起こされた新しい問題に対する対応策について報告や提言があった。最後は、ネット社会を改善し、被害者を出さない安全・安心な社会づくりに連携して取り組むことを確認した。



「利用」と「使用」を分けて考える
「タイは、」
● 学校が「持ち込み」とは違ってない。
● 保護者の責任で買ってもらったもの。
● 携帯してどこにでも持ち歩く。
（自分の部屋でも）（学校でも）
● 「電話」ではなく、高性能・パソコンと「場所」と「場面」を

特別第三分科会

基調講演とパネルディスカッション

ネット社会におけるPTAの役割

「デジタルメディア社会と子どもの健全育成」

日本の高校生を元気にする

高校生新聞® 高校生スポーツ®



■1993年10月創刊 ■タブロイド判 平均28頁 ■毎月10日発行

第12回「高校生新聞社賞」

学業、文化・スポーツ、生徒会・各種委員会、ボランティアの各部門で、高校3年間努力を重ね、特に飛躍した生徒に贈ります。昨年度は全国1778人に授与。2009年度の受賞者全員を2・3月号で発表します。



高校生のための夢探し、自分探し 夢現塾 & 校内ステップアップ進学相談会

各界で活躍する講師の講演と、生徒が希望する大学・短大・専門学校の入試相談会を校内で無料開催。

首都圏で400の高校が利用



SP 賛 学校パートナーズグループ 高校生新聞社

〒194-0022 東京都町田市森野 1-34-10 TEL.042-724-2750
FAX.042-724-2710 <http://www.koukousei-sinbun.co.jp>

平成二十一年度第一回全国会長・事務局長会議

講演「安心ネットづくり」に向けた取り組みについて

総務省総合通信基盤局 電気通信事業部消費者行政課長 二宮 清 治



ここ数年、青少年によるインターネット利用、とりわけ携帯電話をめぐり、様々な取組が行われています。本日は、それらの現状についてご紹介いたします。

まず、青少年と携帯電話を巡る問題として、掲示板等への書き込みに起因する犯罪、ネットいじめなどが取り上げられますが、こうした問題の解決に向け、総務省では、平成十八年から三度にわたり、携帯事業者に対する総務大臣要請を行うなど、携帯電話フィルタリングの普及に取り組んでまいりました。また、フィルタリングサービスについて、高校生が普段

から利用している交流サイトも一律に見られなくなり、利用実態にそわない制限であるなどの指摘があることも踏まえ、利用者の習熟度等に応じたフィルタリングサービスの多様化を図るとともに、第三者機関によって青少年保護に配慮したサイトを認定し、フィルタリング対象から除外するという仕組みの導入を支援して参りました。

一方、未成年者の携帯電話は、保護者名義で契約されている場合も多く、実際の利用者の年齢を確認するという点ではまだ課題も残っております。今後、総務省においても、より確実な年齢認証の在り方について検討を行っていきたいと考えております。

また、フィルタリングとともに、携帯電話やインターネットの利用に対する啓発も重要な課題です。本年四月に施行された「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律」において、違法・有害情報に対する民間の自主的取組を一層促進し、国民のインターネットを使いこなす能力を強化することが理念とされたことも踏まえ、総務省では、これら基本理念を踏まえた政策として「安心ネットづくり促進プログラム」を策定したところですが、民間においても、啓発活動等を担う産学連携の組織として、本年二月に「安心ネットづくり促進協議会」が設立されたのはご案内のとおりです。この協議会では、インターネットの利用環境整備に関する緩やかな目標を共有し、国民運動としての啓発につなげていく憲章事業なども計画されています。

**AIU高校生国際交流プログラム
米国派遣生募集**

【実施期間】2010年7月18日～8月9日
【募集人数】40名(男女各20名)
【応募締切】2010年2月10日 参加費用 無料!

ツアーズホームステイ・ホスティング

＜資料請求・問合せ先＞
AIU 高校生国際交流プログラム事務局
Tel: 03-5619-2635
E-mail: hsd@highschooldiplomats.org
URL: <http://www.highschooldiplomats.org/>

主催: AIU 高校生国際交流プログラム実行委員会
協賛: AIU保険会社、フリーマン財団
後援: 全国高等学校PTA連合会 等

三井住友海上グループ

さあ来い! リスク。

GK

三井住友海上火災保険株式会社
〒104-8252
東京都中央区新川 2-27-2
www.ms-ins.com

安心・安全を
ひろげたい。
マングローブ植林は、
地球の未来にかけた
保険です。

東京海上日動火災保険株式会社
東京都千代田区丸の内1-2-1
〒100-8050
TEL: 03-3212-6211 (代表)

日本の保険は、ジャパンが変わる。

損保ジャパン

株式会社 損害保険ジャパン

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 TEL: 03(3349)3111
ホームページアドレス <http://www.sampo-japan.co.jp>

自己防衛

シリーズ視点
携帯電話

携帯電話、高校生にとつてネット社会へのパスポート。高校二年生の実に九五・九%が保有という統計があります。使い方を間違えると、有害サイト、悪質メール、ネットいじめなど、被害者にも、加害者にもなり得る危険な道具。今年一月、文部科学省からの通達によつて、学校への持込が規制されてきました。確かに、教育に直接必要なものではありませんが、今や、高校生の必須アイテム。子どもたちから、携帯電話・ネットを遠ざけるのではなく、うまく使いこなすための社会整備・ルールが、

今、求められています。

高校二年生のフィルタリングサービス・機能限定端末利用率、一五・六%という結果も統計に出ています。青少年のネット、特に携帯電話の使用状況が、社会問題化しています。学校裏サイトや、ブログ・プロフィールはじめ・個人情報悪用の有害サイトへの接続による出会い系、薬物などの犯罪、悪質メールによる架空請求メールやモバゲーによる携帯依存など。青少年の興味をそそり誘惑してくる窓口になっていきます。うちの子だけは大丈夫という発想は、この小型の端末によつて、さらに目の届かないところで行われている可能性があります。子どものメールやネットの利用状況を確認できる保護者はどれくらいいるのでしょうか。プライバシー侵害だから、子どもを信じているからと、ほとんど手つかずなのではないでしょうか。

今年六月石川県で「いしかわ子ども総合条例」の改正が可決されました。携帯電話禁止条例可決と、センサーシヨナルに報道されましたが、この条例が求めていることは、大きく二つです。①保護者は、子どもの年齢、発達段階等を考慮し、小中学生には、防災・防犯その他特別な目的をのぞき、携帯電話を持たせないよう努める。②保護者は、子どもの携帯電話にフィルタリングサービスを利用しない申し出をする場合は、理由を記載した書面を提出する。行政として、今のネット社会の弊害を憂い、無防備な携帯電話を排除し、青少年の健全な育成のために、最低限のルールを保護者・業界に求めているように見えます。安易に、フィルタリングを外したり、保護者名義のためフィルタリングがかかっていなかったりと、抜け道は多くあります。今ひとたび、保護者一人一人が、我が子の携帯電話は、どのような状況になっているのか、どんな利用状況なのか、確認する必要があるのではないのでしょうか。

2008年度EMA認定全24サイトの状況		
認定サイトの のべ会員数 48,389,824人	1日あたりの総投稿数 29,836,806件 (年換算 約109万件)	サイトパトロール体制 最高責任者数 24名 監視主任者数 135名 監視員数 748名 合計 907名
ユーザー数 強制退会数 2,253件/日 ペナルティ数 324件/日 削除投稿数 25,083件/日 注意・警告数 4,802件/日	EMAへの通報 ●規約違反投稿等に関する情報 337件 ●認定サイトの運用管理体制に関する意見 152件 ●会員登録方法・退会方法等の改善に関するお問い合わせ 109件 ●ペナルティを受けたユーザーからの不満・理由に関する問い合わせ 98件 ●不適切な広告に関する情報 65件 ●認定サイトの運用体制に関係のない情報、又は意味が不明な情報 196件 ●その他 130件 合計 1,087件	
啓発・教育コンテンツ 閲覧総数 706,081回(累計)		

EMA認定サイトの状況

平成十九年十二月に総務省が携帯電話事業者に対し要請したフィルタリングの原則義務化を発端として起草され、青少年をネット上の有害情報から守ることを目指して「青少年ネット規正法(青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律)」が翌二十年六月十一日可決、成立しました。法案は、民間における自主的かつ主体的な取り組みが大きな役割を担い、国および地方公共団体はこれを尊重する」という原則が盛り込まれて成立に至りました。

このような変革の中、EMAは総務大臣要請に基づき、携帯フィルタリングの改善を目的に設立されました。具体的な活動としては、青少年が悪質なサイトではなく管理体制の整備された携帯サイトを利用することで健全に携帯電話を使いこなせる能力を身につけられるように二十年七月から携帯サイトの審査・認定を行っています。特にコミュニティを運営する認定サイトでは、青少年の利用を前提に、二十四時間三六五日サイト上の投稿内容の監視や不適切な投稿の削除、悪質利用者のペナルティの他、一部機能制限、インターネット利用における啓発・教育コンテンツの設置など、二十二項目の基準に充足したサイト運営を行っております。

二十年度は、二十四のサイトが認定されておりありますが、認定サイトののべ会員数は約四千八百万人、日々の投稿数は約三千万件(年換算で約一〇九億件)と電話やメールに匹敵する主要なコミュニケーション手段となっており、認定サイト事業者は、これら膨大な投稿をシステムによる抽出と目視により監視を行っています。この投稿監視によって、削除された投稿は、一日平均で約二万五千件あり、悪質な投稿者の場合には、退会も含めた処分を課しています。EMAでは、これら認定サイトの取組が認定時の水準を維持されるように利用者からの通報等も受け付けて様々なチェックを行っております。インターネットは、日進月歩で進化していますが、EMA及び認定サイト事業者は関係各所と協力して、青少年が健全にインターネットを使いこなせるように日々、啓発・教育やサイトの運用監視等の取組みを進めています。

このような取組みは、全て子どもたちが健全にインターネットを利用するためのものです。少しでも不安を感じる場合、子どもたちの言いなりにならず、フィルタリングを掛けようお願いします。

(前会長・現顧問 高橋正夫)

北海道札幌拓北高等学校

地域と共に自然を守る活動を続けて

理科研究部の活動の紹介

北海道札幌拓北高等学校は昭和六十三年に開校し、現在は二、三年がハクラス、一学年が七クラスの普通科高等学校です。人口一九〇万人の大都市、札幌市の北東の端に位置していますが、隣接するあいの里公園をはじめ、茨戸川や篠路福移湿原など石狩川下流域の豊かな自然に囲まれています。開校当初より地域に根ざした学校を目指し、生徒会やボランティア局、生徒有志による地域行事へのボランティア参加や、学校祭のクラス発表の上位クラスのステージ発表などを行ってきました。

その中でも理科研究部は創部以来、身近な地域の自然や生き物をテーマに研究活動を行い、その成果をさまざまな機会で見せ、そのすばらしさを多くの人に伝える活動を行ってきました。特に部の研究発表を聞いた地域の方々により、自然保護団体のNPO法人「カラカネイトンボを守る会」が一九九七年に作られ、様々な活動と一緒に進んでいっています。現在、地元の小学校や中学校、町内会や福祉施設の方々とともに一層活動の輪が広がっています。

学校から車で五分ほどの所にある篠路福移湿原は、かつての石狩湿原の一部が札幌市内で唯一残っている場所です。ここには絶滅のおそれのある貴重なトンボや鳥類、魚類や植物などが生息しています。しかし、開発による埋め立てにより年々面積が小さくなっています。理科研究部では湿原の環境の変化や保全の方法をさぐる研究を長年行ってきました。また、多くの人々に関心をもち、協力してもらうため湿原観察会や、各種の大会、パネル展で現状を多くの人に知らせ、訴えていく活動を行っています。



湿原の調査

で発表しています。こうした活動の様子は、新聞やNHKの番組などでも紹介していただきました。

篠路福移湿原での調査・保全活動



ホタルの放流会

ホタルの放流活動

この活動は約十四年前から行っています。地域の人々、特に小学生に対して、自然に関心をもってもらうきっかけにしてほしいと願い始めました。幼虫の放流会は五月下旬に地元のあいの里東小学校の四年生と共に進めています。部員がホタルの生態について説明した後、ホタル池の整備と一緒に、部員が一年間毎日世話をし、飼育した幼虫を放流します。また、ホタルが成虫になった姿を見もらうため、七月下旬にホタルの光観察会も行っています。理科研究部がホタルの光るしくみなどについて説明した後、あいの里東中学校合唱部、拓北高等学校吹奏楽局によるホタルコンサートも行い、その後にホタル池に移動し、光っている様子を観察します。毎年、二〇〇名を超える方々が参加する地域の行事として定着してきました。

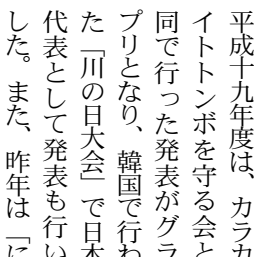


あいの里公園内のトンネウス沼と校舎

【地域で行っている行事】五月にあいの里公園から茨戸川まで植物や野鳥を観察しながら歩く「自然観察ウォーク」、八月月上旬に地域の小学生を対象に部員が講師になって行う「昆虫採集教室」、九月中旬にカラカネイトンボを守る会主催であるあいの里公園内のトンネウス沼の増えすぎた植物やヘドロを取りのぞく「トンネウス沼の大掃除」なども行っています。また、カラカネイトンボを守る会や札幌旭丘高等学校生物部の皆さんと共に研究や活動の様子を知ってもらうためJR札幌駅やあいの里教育大駅でのパネル展も行っています。こうした活動が評価さ



昆虫採集教室



韓国「川の日大会」発表

ばん熱中クラブ、今年には「北海道中ひざくりげ」というNHKの番組でも採りあげていただきました。このように拓北高等学校理科研究部は地域の自然をテーマに、地域の住民の方々や小中学生など多くの人のつながりのなかで活動を行っています。今後、多くの人と協力して自然を研究し、環境を守る活動を続けていきます。

らの便り
こにある」vol.8

ひたすらに頑張る子どもたち。
をもって導く先生たち、
Aの仲間の姿をお伝えします。

「青春白書全国か 一輝く姿がこ

未来を見つめ、夢を追い求め、
その子どもたちを熱意
そしてP.T

【学校の概況】

中毛地区の高校教育の
拡充を使命として、昭和
五十八年四月、普通科六
学級で誕生しました。

昭和六十一年、時代の
要請を受けて英語科が増
設され、平成九年には、
英語だけでなく他の外国
語によるコミュニケーション
能力の育成・充実
を目的に「国際科」に



学科改編
し現在に
至ってい
ます。創
立二十七
年を迎え、
五七九名
が在籍し
ています。

群馬県立前橋西高等学校

堅忍剛健

自律敬愛

【教育目標】

堅忍剛健、自律敬愛を
校訓として、高い知性、
豊かな情操、健全な心身
を涵養し、国際社会に貢
献する人材を育むことを
教育目標にしています。

【所 在】

県都前橋市の市街地よ
り六kmほどの西端で、校
章にもデザインした上毛
三山の景観に恵まれ、上
野国分寺跡など歴史に薫
る清野の里に立地します。

【教育課程】

普通科は、全般的な基
礎・基本を一学年で身に
つけ、二学年で、各自の
希望に応じて、文系・理
系に分かれ、三学年では、
選択科目を深化させる学
習が、先生方の得意分野
をフルに生かして行なわ
れています。

国際科は、二学年から
英語の他に、フランス語、
中国語、スペイン語、ハ
ングル語から一科目を選
択し、国際社会に通じる
知性を身につけます。さ
らに、海外体験学習やイ

ンターナショナルデーな
どで、生きた国際理解も
図ります。両科共に英語・
数学などに、習熟度別
少人数授業が実施されて
います。

【進 路】

平成二十年度末の現役
国公立・私立大学（四
年制・短大）進学率は
五十三％でした。進路指
導は、校内においては、
土曜日課外授業、進路課
外、各種面談、校外模試、
大学等出張授業、進路講
演会などで、校外におい
ては、大学等見学会、三
学年の赤城山夏季学習合
宿があり、充実した指導
を行っています。

【部活動・課外活動】

文武両道を目指し、レ
スリング・剣道・空手・
陸上などが全国大会へ駒
を進めてきました。他の
部活も県大会の上位を狙



う練習を重ねています。
吹奏楽部は複数回金賞を
受賞しています。また、
昨年・本年とも国際科の
生徒が群馬県国際教育部
会主催の英語弁論大会で
優勝しています。

【青春白書】

春は、桜花の中庭でス
プリングコンサートに始
まり、榛名湖を囲む外輪
山で、まるで人生のよう
に山を登っては降りるを
四度繰り返す強歩遠足。
夏は担任の先生と共にク
ラス対抗での球技大会。
秋は全員一つになって競
技に臨み、Pからも見応
えがあると好評の体育大
会、マラソン大会。そし
て生涯忘れられぬ思い出
となる修学旅行。冬は万
葉の時にタイムスリップ
する百人一首大会。また、
本年六月には三年に一度
の文化祭(第九回黎明祭)
を実施。模擬店も多彩で
したが、全クラスで作成
したクラスTシャツの競
演も見事でした。生徒た
ちが青春の輝きに包まれ
る瞬間が前西のここ彼処
にあります。

【PTA活動】

創立四半世紀を超え、
今までの伝統を踏まえつ

つ、新しい風となる生徒
たちが、新たな伝統を築
けるようなPTA活動に
取り組んでいます。

文化祭では、上州名物
の焼きまんじゅうを焼
き、その売上金で部活選
手の故障を少なくするた
めに、筋トレ室にスト
レッチベンチを購入しま
した。

夏場の暑さ対策として
はエアコンの導入を検討
して参りましたが、今年
は、環境視点と経費面で
グリーンカーテンを試行
栽培し、ecoを生徒・
教職員と実感。

また、生徒の生活面で
は、P役員による校内マ
ナーアップ運動を展開し
ました。生徒へのアン
ケートなども実施し(写
真)、生徒から「朝、気
持ちよいくらい挨拶をし
てもらっているのので良
い気持ちで勉学に励んで
います。」の声も届きま
す。



た。校則を知ることが究
極の自己防衛であること
に気づき、規範を考え、
変えたり、創ったりする
意義を社会に出る直前の
高校というコミュニケーション
でトレーニングする必要
性を確信しました。

最後に、社会は成人に
も厳しい時代ですが、生
徒・教職員・保護者・同
窓会が「わたしたちはい
つでもひとつ」の精神の
もと、生徒及び卒業生の
知の源泉であり心のより
どころである前橋西高等
学校を支援するPTA活
動をめざしています。



副会長紹介

相川順子副会長は青森県青森市出身。昨年愛知大会で見事な大会宣言を行いその存在が広く認識されました。児童養護施設職員として、多くの子どもたちの保護者の立場でPTA活動をおこなっておられます。持ち前のガッツで全国大会のより良いあり方について取り組まれてきました。一方でまわりに細やかな心配りをされる、魅力のあるお人柄です。ご主人とご子息、ご主人のお母さまとの四大家族。

荻莊誠副会長は新潟県新潟市出身、昨年は進路対策委員長としてご活躍。いつも気負うことなく自然体で、何事にも誠実に取り組まれる姿はさわやかで、多くの方から厚い信頼が寄せられています。奥さまと一男三女の六人家族。捨て猫、捨て犬を何匹も飼い、さらに金魚、亀も飼っているとのこと！お人柄が伺えます。

お二人とも県連会長、全国理事二年目で、フレッシュな感覚と熱意で高間専逸会長を支えています。



左から荻莊副会長、高間会長、相川副会長

各委員会報告

委員長 小出 邦彦

第二回の進路対策委員会は、㈱リクルート社の「キャリアガイダンス」角田浩子編集長、「カレッジマネジメント」小林浩編集長、それに第一回からご出席の城嶋朋子氏の三名を迎え、第三回の「高校生と保護者の進路に関する意識調査」の結果を振り返りながらの研修と「高校生を取り巻く進路環境の変化について」の研修を行いました。

生徒の学習意欲の低下、入試の多様化、生徒の進路選択・決定能力の不足、家庭・家族環境の悪化、教員の進路指導に関する時間不足等、進路指導の難しさを改めて感じました。意見交換では「リクルート社にはメディア色を抑えて、保護者に役立つデータを望みたい」との意見も出しました。第三回の委員会は、十二月十一日リクルート社において調査結果報告と結果について議論・提言のまとめを行います。報告書は二月十日前後の完成になることを確認しました。

委員長 深澤 資弘

健全育成委員会は九月二十六日で第三回となる委員会を開催いたしました。子育て事業アンケート調査の進捗状況報告や、五都県でのシンポジウム開催準備状況と、そこで行われる会場アンケートの内容、またシンポジウムの報告書作成について確認を行いました。メインの議題は毎年懸案となっている事業報告書の有効活用についてで、各委員は宿題となっていたそれぞれのプランを発表しあい活発な討議が交わされました。単Pに問い合わせをしても報告書自体の存在を知らないこともあったりして、報告書を視覚的なツールにできないかとの意見も出されました。また他委員会でも同様と思われる翌年度への引き継ぎが十分に行われないことも、有効活用に至らない原因の一つではないかという意見も出されました。薬物乱用防止パンフレットも含め全高P連が苦勞して作り上げたものが十分活用されるよう今後も検討を重ねたいと思っております。

委員長 豊岡 武士

研修委員会においては、本年度の沖縄大会の総括及び平成二十二年度の東京大会と二十三年度の北海道大会について協議した。沖縄大会の総括では、メイン会場に参加者全員が入場できなくて、五会場に分散した悔みはあるが、受け入れた沖縄県P連の笑顔と手厚いもてなしで大会運営は好評であったとまとめた。

東京大会の取組み状況について実行委員長より報告があった。

・大会テーマ：人間力を育てて作ろう 大きな輪

・家庭・学校・地域・社会と心をつなげよう
・平成二十二年八月十九日(木)、二十日(金)、二十一日(土)

・日本武道館を主会場に、東大安田講堂、昭和女子大入見記念講堂、日比谷公会堂、九段会館、その他・特別第3分科会「キャリア教育とPTA」

北海道大会について、副委員長より準備状況と概要についての報告があった。
平成二十三年八月二十四日(水)、二十五日(木)、二十六日(金)札幌にて開催

委員長 榊原 綾子

沖縄大会において「全国単位PTA広報紙展示事業」を開催し一〇五単Pの参加がありました。委員会では、スタートから三日目を迎えたこの事業が周知されてきたとの認識に立ち事業の意義を再確認し「全国の会員の参考となる広報紙をより見やすい状態で掲示する」ために、次年度からは各都道府県市P連より二単位PTAとし、会場に展示ブースを設けるなどして、ゆっくりとご覧いただける環境を整えていくこととしました。また、より多くの会員の皆さまに関心をもっていただくための会報の在り方についても話し合い、紙面作りについてさらに改革を進めることを確認しました。また、本号では、大きな課題となっているインターネット、ケータイに注目し、第一回会長事務局長会議で「安心ネット」の講演をいただいた総務省から寄稿していただくこともにシリーズ「視点」でも取り上げることとしました。各単Pでもこの問題に取り組むための参考になればと思います。